■事例４
メインバンクとして、明らかに公的使命が欠如していると思われる事例

＜本件に係る経緯等＞

地元の土木建築業Ｘ社は、業歴約50年を有する老舗業者である。取引金融機関は創業以来、地元Ｙ行をメインとして取引を継続していた。業況は業種柄、２期連続赤字を抱え資金繰りにも苦労していたが、ようやく10年３月期決算ではコスト削減等の努力により黒字決算が確実視されるまでになった。

Ｘ社は３月、資金需要が発生し、Ｙ行へ融資申込を行なったが、同行の支店長は２期連続欠損であり、10年３月期決算を見てからでないと検討できない旨の回答。

＜メインＹ行に求められる対応＞

Ｘ社の資金需要は３月であり、所謂生きた資金を貸出することが地元金融機関としての公的役割であるはずだが、これを決算が出てからでないと検討できないという回答は公的使命の欠如以外の何物でもない。単純に拒絶することは、メインとして、しかも地元金融機関として評価できることではない。

何らかのアドバイスもしないで、拒絶した金融機関は公的使命を忘れ、自己査定マニュアルに沿った対応しかできないことはなんとも寂しい事例である。